



▲地蔵川に沿ってひらけた中山道・醒井宿

水のおかげが風景に表れる清らかな町

水が恋しくなる季節に訪れたい町のひとつに米原町醒井がある。中山道を東から近江に入って二つ目の宿場町。今号の特集は、地蔵川にそった家並みに江戸時代の名残も見られるこのまちを、「水」といっしょに探検してみよう。

清流に 磨かれてきた町

醒井の町を訪れたのは、桜が散りはじめた四月の上旬だった。さわやかな風が吹くたび

に、花びらがはらはらと舞う。無数の花びらが、地蔵川の川岸を淡い紅色で埋め、水面をゆらゆらと流れていく。

清らかな流れと桜並木、そして古い家並みが続く通りを歩くと、花びらのように水の流

水は醒井にあり

特集「通くわく・さめがい」



れに身をまかせているような心持ちになる。

醒井は、地蔵川の石積みのように、長い年月をかけて清流に磨かれてきた町である。桜並木も家並みも、そして中山道も、美しい水があつてこそ。水のあるところに人が集まり、町がひらけ、宿場がつくられて、歴史が刻まれてきた。

元禄年間に建てられた 問屋場

江戸時代、醒井は中山道の宿場町として栄えた。その繁栄ぶりは、問屋が十軒もあつたことに示されている。

問屋とは、街道をゆく大名や役人たちに人足や馬を提供したり、運ばれてくる物資の積

み替えをおこなつたりしたところである。いわば江戸時代の物流の拠点である。たしかに中山道は江戸時代の幹線だが、それだけなら他の宿場町と変わりはない。くわえて、醒井は、東海と畿内を結ぶ物資の通り道にあつたのである。

この道は、九里半街道と呼ばれた。伊勢湾から美濃の杭瀬川をさかのぼり、大垣の湊に入つた物資は、馬の背に揺られ関ヶ原を経て醒井に着く。そして、ここから船に積み替えられ、天野川を下って米原の湊に出て、びわ湖の船運で大津へ至る。大垣から醒井を経て米原までの道のりが、九里半であつたことから、その名がついたという。

町のなかほどに、米原町醒井宿資料館として保存されている「問屋場」がある。宿場町のなかで、往時の問屋場が昔のままで残されているのは、ここだけだという。元禄時代に建てられたという歴史に、この町の奥深さを感じる。

切妻平入りの 町家がほとんどの

建物のなかには、よくあるような展示物はない。あるのは、江戸時代の空気に包まれた空間だけである。それが、この資料館の価値をいっそう高めている。

地蔵川に面して建つ問屋場は、平屋建て平入りの質素な建物だ。屋根は板葺きである。だが、太い柱と梁で区切られた玄関を抜ける

居醒の清水に癒されたヤマトタケル

『古事記』のなかの ヤマトタケル

哲学者・梅原猛作の「ヤマトタケル」は市川猿之助のスーパー歌舞伎で大当たりをとったし、作曲家・三枝成彰のオペラ「ヤマトタケル」は、彼の仕事の中でも斯界の評価も高く、代表作となった。インターネットで「ヤマトタケル」を検索すれば、三千件を超える情報が詰まっているし、ヤマトタケル専門のホームページまである。

どうしてこんなに人々を魅了するのだろうか。

神話の中のヤマトタケルは、決して立派な英雄とはいえない。双子の兄を殺したり、女に化けてだまし討ちしたり、伊吹山の神を馬鹿にしたり、婚約者を置き去りにしたまま何処かへ遠征に行ってしまったり、数えあげれば片手では足りないくらい、いいかげんな奴。ところが喧嘩は滅法強い。だから、こんな乱暴者はそばに置けないと、父景行天皇は各地に遠征を命じたのだった。

西征、東征と転戦する中で、熊襲をやっつ

ける、イズモタケルを成敗するなどの武功をあげ、凱旋してみればまた、何処其処へ遠征せよとの命令が下り、「自分は死ぬのを望まれ

ている」と感じ始める。やがて次の天皇の呼び声が高まってくると、それは権力闘争の矢面に立たされることを意味し、身に危険が近づいていることになる。

案の定、天皇に呼び出され、強敵蝦夷のいる東北平定を命ぜられることになった。それからほどなく、信濃を経て、尾張の許嫁のもとに帰ってきた。「お前を抱きたいけれど、月のものがきている」と歌を詠むと、「あんたがほったらかしするから、月のものが来て

▶森大造氏作のヤマトタケルの表情は、凛々しくも陰しい…。



しまったのよ」と

さて、一緒に寝たのはいいが、刀を置いたまま伊吹の山の神を征伐に出かけてしまった。山麓で牛のように大きな白猪に出会った。白猪に化けているのは神の使者だろう。山の神を成敗してからの帰りにでも殺してやろう」といって山を登って行く。すると大雨が降り、タケルは正気を失ってしまう。白猪に化けていたのは山の神の使者ではなく、神そのものだった。山の神は大言壮語するタケルに怒り、大雨を降らせたのだ。

ほうほうの体で下山したタケルは、玉倉部というところの泉に着いて休んだ。そこに居ただけで正気に返ったことから、その泉を名付けて「居醒の清水」と呼んだ。それが醒井

の語源になったという。

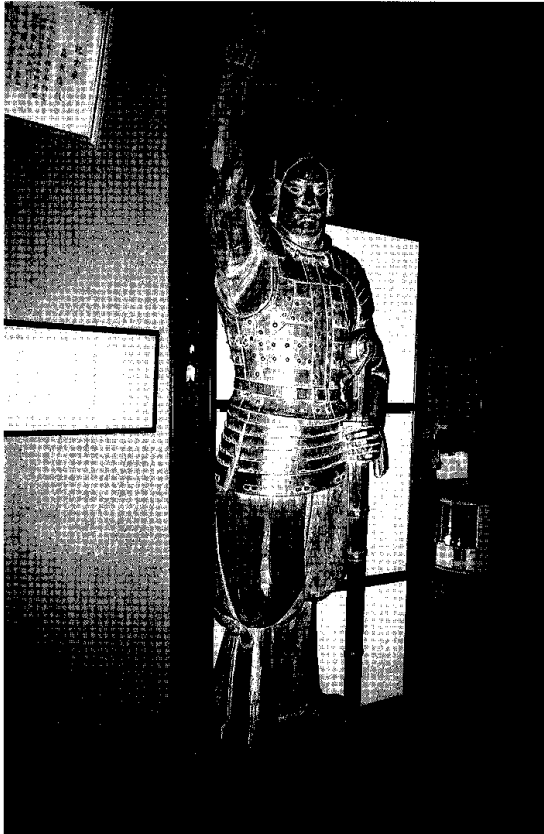
醒井の ヤマトタケル

醒井の集落には、三体の「ヤマトタケル像」が入々の暮らしを見つめている。一つは、松尾寺政所近くの川崎家に、一つは「居醒の清水」そばの加茂神社に、いま一つは醒井公民館の玄関にある。いずれの像も、右手は天を衝き、左手に持った剣で大地を衝いているようなポーズ。高さ一七五センチメートルあまり、がっしりとした体軀。

川崎家のものは木彫で、ほとぼしるような覇気を感じさせる。作者は上丹生出身の彫刻家・森大造氏である。(造形作家・森雅敏氏の父)。

この作品は「燎原」と題されて、昭和十六年ニューヨークで開催された世界博覧会に出品されたものである。それが後に、森氏と旧知の川崎米造氏の手に移り、現在も川崎家の玄関に入ったところに屹立している。

「かれこれ六十年になりますね」と応対してくれたのは米造さんの奥さんで、九十一歳になるすゑのさん。



▶川崎家の玄関に置かれた木彫のタケル像。

水になった ヤマトタケル

醒井は神話・伝説に彩られ、湖北の中でも加茂神社本殿のすぐ後は名神高速道路。車が激しく往来しているはずなのに意外に静かな佇まい。澄み切った地蔵川の瀬音が聞こえる。「鞍掛け石」も残っている。

「県の展覧会にお貸したこともありましたが」と、明治四十四年生まれとは思えぬはきはきとよく通る声で説明してくれた。

醒井公民館にあるヤマトタケル像は木彫かと見迷うが、よく見ると石膏像に漆を塗って木彫風になっている。森大造氏から寄贈を受けたものだ。

加茂神社のヤマトタケル像はブロンズ。公民館の石膏像を原形に、平成二年十二月、「創意と工夫のまちづくり事業」の一環として、泉を見下ろす地に建立された。泉にはタケルが腰を下ろしたという「腰掛け石」や「鞍掛け石」も残っている。

加茂神社本殿のすぐ後は名神高速道路。車が激しく往来しているはずなのに意外に静かな佇まい。澄み切った地蔵川の瀬音が聞こえる。



頭 製造
饅 餅 製 最中
観 世 音 最 中
く る み ゆ べ し
季 節 の 和 菓 子

押谷製菓舗

東浅井郡びわ町川道
TEL 0749(72)2043